

ワンポイントアドバイス：「教材探し」

1 教材の意味と役割

教員として大切なことはさまざまにあります。中でも「教材探し」は、教員としての職務の重要な柱の一つが「授業」であることからその意味はとても大きいです。

授業は、どのような「教材」を選択するかによって、子供たちの興味や関心をかきたてられるか否かが分かれるとも言えます。

もちろん、教科書や副読本などあらかじめ用意され、市内の学校の同一学年であればどこでも等しく配られるものも大切な「教材」です。これらは、授業を進める上での「基本セット」と考えてよいでしょう。この「セット」だけでも授業を進めることは可能ですが、現実には、教員一人一人の個性が異なるように授業の「味付け」もまた違いがあり、そのことがそれぞれの授業の「ユニークさ」ともなっています。

その「ユニークさ」の構成要素のひとつとして大切な役割を果たすものが、教員自らが探したり開発したりした「教材」だと言えます。これは「基本セット」に対して「オプション」と考えられるものです。

では、その「教材」とはどのようにすれば、見出すことができるのでしょうか。

2 教材探しのコツ

まず必要なことは、日常生活全体の中で「何かヒントはないか」「授業で使えるものはないか」といった「あたま」をもつことです。

普段の何気ない生活の中で、例えば通勤途上の電車で、学校までの道のりの風景で、買い物や旅行で出かけた先で、新聞やテレビは言うに及ばず、授業のアイデアから触発されて見出される「教材」のヒントは、特別な探し方をしなくても、実は自分自身が気付かずに見逃しているだけで、いつも「そこ」にあると言えます。

「カラーバス効果」という言葉があります。朝のテレビ番組などで「今日のラッキーカラー」というコーナーを目にすることが多いですが、この「ラッキーカラー」を意識するとその日一日の生活の中で、その「色」が何となく目立って目に飛び込むことを感じることがあります。人間は物事を見たり聞いたりするとき「視覚」や「聴覚」により、見えるもの聞こえるものを「ありのままに」とらえていると考えがちですが、実際は「見たいように見」「聞きたいように聞いて」います。「脳」がその人の好みや経験など複雑な背景をもとに判断し、見聞きしているということです。この理屈を応用する、すなわち、授業で使える「何か」がないか、ということ意識することにより、普段の生活の中から「教材」のヒントが次々に見出される可能性が一気に増します。「アンテナを張る」という言葉に置き換えてもよいでしょう。

教員として子供たちにいかに「わかりやすく」「興味関心」をもたせられる授業を開発するか、という使命感をもとに、日々の授業を工夫改善し続けようとする意思そのものが、実は教材探しの根底には大切なのです。

